

ボランティア・ニュース 第10号 2008.1.31 発行

ボランティアの皆さん

新しい年をいかがお迎えになりましたでしょうか。今年も北大総合博物館およびボランティアの会へのご協力をよろしくお願い致します。

ボランティアの会は今年で満5年を迎えます。2003年2月21日に作られたボランティアの会会則によると、会員資格規定として、「会員は『北海道大学総合博物館ボランティア活動員受け入れ要綱』に基づき承認されたボランティアとする」とあります。したがって、ボランティアになるためには、博物館の承認が必要ですが、「ボランティアの会」に入るとはボランティアの意思次第ということになります。しかし、ボランティアの会としては、これまでボランティアの皆さんに入会の勧誘を積極的には行ってこなかったように思います。今年は多くの皆さんをボランティアの会にお誘いして、会をさらに充実させたいものです。

ところで、私は昨年10月頃から、北大の高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部の木村純教授が主催しておられる「博物館と生涯学習研究会」（大学院公開ゼミ）に参加しています。そこでは、主に札幌市内の博物館や美術館などでボラ

ンティア活動を行っている人たちが、「学びを通じたボランティアの活動」あるいは「ボランティア活動を通じてボランティアも成長する」という視点からボランティア活動について議論しています。出席してみて、一般的に年配者が多い他の組織のボランティアとは異なり、北大総合博物館の場合は年配者から学生まで年齢差に幅があり、また個々人の興味も大学という特質を反映していろいろな分野があり、ボランティアとしての仕事内容も多種多様である、という北大ボランティアの特徴も改めてわかりました。

その特徴をさらに生かすためにも、ボランティアたちの自主的組織としての総合博物館ボランティアの会をもっと充実させ、ボランティア同士の交流を深め、それぞれの分野をお互いに理解しあい、総合博物館をサポートして行かなければならないと感じています。

なお、「博物館と生涯学習研究会」は毎月第3月曜日の午後7～9時に北海道大学情報教育館4階(北区北17条西8丁目)で開催されています。どなたでも参加できます。

「ファールにまなぶ」展・「レイチェル・カーソン展」無事終了

ファールにまなぶ展にご協力ありがとうございました

7月1日から9月17日までの79日間、『昆虫記』刊行100年記念日仏共同企画展「ファールにまなぶ」展が開催されました。

夏の企画展では2005年のマンモス展、2006年のモンゴル恐竜展と展示解説や監視活動に参加しましたが、「ファールにまなぶ」展は展示解説、監視活動を有償の学生が行うことになったため、ボランティアの会では募金を中心に協力しました。

期間中の入館者は4万人を超え、募金額は何と1,600,000円に達しました。色々アクシデントも発生した「ファールにまなぶ」展でしたが、ボランティア20数名が博物館の顔として、来館者に声

かけをしたり、展示場所の案内をしたりしました。ピンバッジのプレゼントの一番人気は「ふんころがし」。もうないんですという人が続出し、プレゼント用にマグネットの「ふんころがし」が追加されましたが、これも大人気でした。

皆さんのご協力が無事終わることができました。どうも有り難うございました。

そして、来館して下さった皆さん、募金して下さいました皆さんに感謝申し上げます。どうもありがとうございました。(永山記)

100年記念パネル展に取り組んで

2007年5月27日がレイチェル・カーソン女史生誕100年でした。これを記念して北大理出身の近藤務氏を中心になって北大博物館3階でパネル展を開きました。期間はフアール展と同期間でした。前館長藤田教授の賛同も得、博物館当局の絶大な協力もあって開くことができました。寄付金を広く募り記念講演は三人の講師(藤田正一前博物館長・日本レイチェル・カーソン協会理事長上遠恵子氏・同専務理事原強氏)を招聘して開きました。主要なパネルは、レイチェル・カーソン日本協会が提供してくれました。この特別展示を開いた効果として特筆することが何点かあります。その一つは会員の一人が翻訳したレイチェル・カーソンの修士論文(1932年)でした。本邦初公開だそうです。この論文に関するパネルも独自制作し

て展示しました。もう一つは会期中から展示した藤田正一教授指導のもとに教員と北大生が協力制作した「ヒトと動物の共生を考える」パネル21点です。また3階会場ではフアール展を観た親子連れが休憩しながら色鉛筆で絵を書いてくれました。その数は518枚にも及びました。北海道の会会員はパネル展が終わった後も2008年末まで学習会を毎月開いてレイチェル・カーソン著書などを学んで行く予定です。
(沼田 勇美)



余談 悲劇の北大生宮澤弘幸の『青春を綴じたアルバム展』没後60周年

2007年2月22日～3月25日、表題の博物館企画展示が開催されました。アルバム展を見学した方は判ると思いますが、第二次世界大戦開戦の1941年12月8日に北大英語教師であったレーン夫妻と宮澤学生が特高警察にスパイ事件で逮捕されたのでした。今回のアルバム展を観た上田農学部教授が父上の上田誠吉弁護士に知らせたことから余談が始まりました。宮澤弘幸さんの妹「秋間美江子さん」から手紙が寄せられたのです(平成19

年10月末)。数年前に、コロラド州ボルダールの秋間さん宛に手紙を出したことがありましたが返答がなく、もうこの世の人ではないものと藤田教授と話していたのです。「アルバム展、すばらしいことしていただいて感謝で一杯です・・・もう一度札幌にゆこうと前進しております。」と書いてありました。展示会に携わった者の一人として宮澤家の一人に心が伝わったことに無上の喜びを感じた一刻でした。(沼田 勇美)

第1回ボランティア講座&交流会が開かれました。

11月11日(日)、第1回のボランティア講座&交流会が開催されました。

最初に湯浅先生から博物館の歴史、組織、大学・社会での位置づけ、大学博物館の使命が話され、続いて木村教授(高等教育機能開発総合センター)が「博物館の『学び』とボランティア」というタイトルで講演されました。

先生はボランティア活動導入の経緯、活動内容、位置づけについて具体例を挙げて紹介、博物館のボランティアの学びには来館者から学ぶ、ボランティア相互に学ぶ、ボランティアを継続することで学ぶの3種類あること、ボランティアが「博物館で学ぶ」だけでなく、「博物館を学ぶ」ことが重要であることが話されました。

湯浅先生からはボランティア活動の概要が紹介され、

ボランティアの条件、登録、脱退の手続き、ボランティア室の利用、名札着用の必要性やユニフォーム紹介、活動保険への加入、コピーなどの使い方が説明されました。12グループの活動内容が担当の教員や庄子さん、ボランティアの方々から紹介されました。また12グループ以外の活動(受付、募金、誘導、展示室対応、展示の設定、撤収、内覧会、講演会、オープニングパーティ等)も紹介されました。「ボランティア募集要項」リーフレットはボランティア室や展示室に置いてありますので、登録済の方も確認下さい。

この講座&交流会には教員も含めて24名の方々が参加しました。

(11月19日付け、湯浅先生のボランティア宛メールから抜粋しました。)

野幌での昆虫観察会に再び参加しました

植物グループ 星野フサ

元会長の久万田先生指導の野幌昆虫観察会が 9月 21 日に開催されました。参加者は 6 人でしたが野幌の初秋を満喫できました。

木漏れ日を堪能しながら久万田先生の人間味溢れる御指導に心から感謝したのです。

昨年と違ってスズメバチに擬態したハナアブはいないし瑠璃色の小さい蝶シジミもいませんでしたが、多くの崇高な情報を入手することができました。ハチの巣はありましたし「アルジ」もいましたがさされることなく無事でした。

川は増水していて危険でしたが助けてもらって流されずに安全にわたることができました。

道路脇にあった大きなきのこのかさの直径は 15 cm あったと思います。きのこは最近の雨の多い日からして現れたのでしょうか！ 食べられそうだとか毒だろうとか話が弾みました。あとでこの写真のキノコはカラカサタケの仲間の「マントカラカサタケ」と教えて頂きました。去年は 7 月 21 日でしたが今年は秋分が近いいためか



虫の数は少なめのような気もしましたがそれでも名前をメモったケムシ、ハエ、オサムシ、デンデンムシはかなりの数になりました。

観察した虫の一部を紹介します。

ノシメトンボ:しっぽの先まっすぐ、胸の模様の特徴で判定できる

オカモノアラガイ:あわびのような貝殻のデンデンムシ

エゾマイマイ:殻が丸く模様は黒、白が明瞭でなく全体に褐色

サッポロマイマイ:殻が丸く、模様が黒と白がてっぺんまで明瞭

キビガイ:5mm くらいのタニシ

ヤドリバエ(ハナアブのなかま):羽が開いたハエ、ガ



の幼虫の中に寄生する。この幼虫はアブラムシを食べるので益虫

リンゴドクガの幼虫:毛の色は黄色で毛の長さ約 1cm、橙色の長いしっぽが一本あって

体節の毛の根元に直径 3mm の黒い斑点をもち身体を丸めて威嚇する(右の写真)

モンシロドクガの幼虫:さわるとかぶれる、小さく細

くて赤い、これは何度も見たことがある

エゾアカネオサムシ:黒いものと緑かかったものがある。頭は小さく、お尻がでかい

ヒメクロオサムシ:小さめである

ヒトリガの幼虫:キツネ色の毛をもつ



気になったのは最近の人間社会が忘れてしまった身の危険察知が体長 3 cm 程のリンゴドクガができていたことでした。身の危険を察知したとき、身体を丸め直径 3 mm ほどの黒い斑点が大きく見えるように身体を丸めたのです。こんな 2cm ほどのケムシでも危険を察知できるのに日本では子どもの親殺しに兄妹殺しなど、痛ましい事故が発生しています。

人間社会では殺さる前に、その状況を察知できない事態がいま起こっている不思議さを感じました。

それから最近家にハエが全く入ってこないことは何を意味しているのでしょうか。これも何かを警告しているのではないかと考えてしまいました...

御指導頂いた久万田先生に感謝し、企画して下さった永山さんと参加して頂いた皆さんに感謝して帰路についたのでした。どうもありがとうございました！

9月28日～30日までの3日間、自然保護観察員講習会が酪農学園大学で開催されました。

前述の昆虫観察会で学んだ、サッポロマイマイを発見。本州からきた講師に教えてあげました。めずらしいものを見たとき携帯で写真を撮っていましたよ。ちなみに酪農学園大学に隣接する野幌森林公園は天然のナメコなど豊かな自然を感じるこ

とができる素晴らしい場所でした。(永山)

中国新聞
に紹介され
ました。

1月7日付けの中国新聞「天風録」に『昭和初期のれんが造りの三階建て。大型恐竜の化石など動植物、鉱物、医学標本から最新の研究資料まで、約百万点を収める。

館内にはグッズの売店まである。開館以来の入館者が36万人を突破したというのうなずける気がした。・・・北大の場合、110人の市民ボランティアが研修を受けて、標本・資料の整理や展示解説に活躍しているという。見るだけでなく、一緒に活動してみるともっと楽しくなる』と北大博物館が紹介されていました。嬉しいですね。

中野さんからの情報提供でした。

談話会 & 忘年会は大盛況

12月14日（金）「バハマの植物と昆虫一新大陸に生きるものたちの暮らしと歴史」と題して談話会が開かれ、13人が参加しました。

お話しは博物館資料部研究員の稲荷尚記さん。たくさんの写真で、カリブ地方の気候風土や植物の話をしてくださいました。昆虫が専門の稲荷さんなので、てっきり昆虫の話かと思って参加した方も多かったようですが、お話しの中心は植物。

日本には生息していない植物は、図鑑やインターネットで調べたりと苦労が多かったようですが、それでも氏名不詳の花もあったようです。

“はなきん”なので、会場確保が難しく1次会をボランティア室で軽く一杯、2次会を居酒屋でという変則忘年会。JRのトラブルで、家に帰られなくなった研究員の飛び入り参加者もいて賑やかな忘年会でした。

現在の企画展示

水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史 2007年12月18日

—2008年2月17日

ウズベキスタンの現代建築と世界遺産 2008年1月22日—2月24日

黒曜石展示 2008年1月15日—3月31日

追記

年末に発行する予定が、係の都合で新年号に「変身」してしまいました。申し訳ありません。

皆さんの活動状況や名簿は館側で整理することになりました。ボランティアの会としては、活動状況を把握することが難しくなったため、今号から活動の記録は掲載いたしません。

今後は皆様からの投稿やニュース部員の情報収集で活動交流をしたいと思っておりますので、活動状況や改善点などどしどしご意見をお寄せ下さい。

ボランティアニュースは下記の北大総合博物館ホームページからもご覧になれます。

ボランティア・ニュース

◆編集・発行

北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者:星野、沼田、永山)

◆発行日:2008年1月

◆連絡先

060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

<http://www.museum.hokudai.ac.jp>